

幼児用レジリエンス尺度の作成

長尾 史英¹・芝崎 美和²・山崎 晃³

Making of an Infant resilience scale

Fumie Nagao¹, Miwa Shibasaki² and Akira Yamazaki³

Resilience is the ability to overcome in the face of adverse circumstances, which is helpful to follow psychological adjustment process on hard and threatening life events. The purpose of this study was to construct an infant resilience scale by child-care worker. In preliminary phase, the authors classified ready-made scales by KJ method, and crossed out hard items to evaluate infant resilience by child-care worker and two items from other documents were added, ultimately 25 items scale was made. Participants in this study were 305 university students (141men, 164women, mean=20.38yrs). The factor analysis (Principal factor method, Varimax rotation) suggest that 3 factors were founded in terms of susceptible interpretations; temperature, non-vulnerability, self regulation. It represented a total of 17 items and was confirmed reliability by measuring test-retest method.

Key Words : resilience, infant, scale, factor analysis

問題と目的

レジリエンス (resilience) は1990年代から注目され始めた比較的新しい研究領域である (高橋, 1990)。Werner & Smith (2002) によれば、レジリエンス研究の発端は次のとおりである。以前はもしある個人が多大なリスクやストレスにさらされているならば、その個人には必然的にネガティブな予後が訪れると考えられていた。しかし、1890年代からは、これらのリスクやストレスが存在しても、存在しない場合と同等の、もしくはそれ以上の適応を示す個人がいることが明らかにされてきたのである。

厳しい環境にあっても、それにうまく適応できる成人とそうでない成人に分類されるが、それは成人に限られるものではなく、幼児においても同様にみられるものである。すなわち、リ

スク要因にさらされているにも関わらず、適応的に乗り越えられる子とそうでない子がいることが明らかになり、この違いを説明する概念としてレジリエンスが用いられるようになったのである (無藤, 1999)。

かつて日本語ではレジリエンスは「弾力性」、「立ち直る力」、そして「生きる力」などと訳されていたが、現在ではそのまま「レジリエンス」として用いられることが多くなった。しかし、レジリエンスの定義は研究者によって様々であり、統一されていない。例えば、「深刻な逆境の中で肯定的な適応をもたらす過程」(Luthar & Cicchetti, 2000)であったり、「リスクがあり、一時的に不適応に陥ったとしても回復する力、傾向」(無藤, 1999)であったり、「困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果」(小塩・中谷・金子・長峰, 2002)であったりする。これら過程、能力、結果のうち、どの部分に焦点をあてるかは研究者によって異なり、統一的な見解はみられていな

1 沖縄市立教育研究所 (現 飯田女子短期大学)
2 新見公立短期大学
3 明治学院大学

い(小塩ら, 2002)。このように様々な定義があるなかで、レジリエンスの概念には中心的な2つの共通点がある。第1に、リスクにさらされること、第2に、そのリスクにさらされた後に好ましい適応の形跡・結果を示すことである(Masten & Coatsworth, 1995)。しかしながら、実際にレジリエンスを捉えることに関しては困難が伴う。その理由はレジリエンスが「不運な出来事」に出合うという前提での概念であるために、実験的にこれを測定することが困難である点、またレジリエンスが機能している過程そのものに気付くことができないために、直接測定することが困難な点である(祐宗, 2003)。

以上のようなレジリエンス概念の特性から、深刻なストレス状況にある子どもを対象とした縦断研究(Werner & Smith, 2002)がなされていたが、現在では日常的なストレスを扱った横断研究(Grotberg, 1995; 高辻, 2002)もみられるようになった。例えばGrotberg (1995)は、国際ナショナル・レジリエンス・プロジェクトにおいて、14か国からなる合計589人の子どもとその家族及び養育者を対象とした横断研究を行っている。この調査により国や経済レベルに関わらず、レジリエンスの高い子どもは共通する要因もっていることが明らかになった。共通のレジリエンス要因とは、子どもの個人内要因(気質など)、子どもによって獲得される要因(問題解決能力、ソーシャルスキルなど)、そして子どもの周囲から提供される要因(サポートしてくれる家族や家族以外の人など)であり、生涯にわたっては個人内要因がレジリエンスの機能に影響することが明らかになった。

乳幼児期を扱ったレジリエンス研究としては、貧困にさらされている子どもを対象とした研究(Murphy & Moriarty, 1976)や、貧困かつ低体重で出生した子どもを対象とした研究(Bradley, Mundfrom, Casey, Kelleher & Pope, 1994)、そして精神障害もしくはネガティブな経歴を持つ親の子どもに関する研究(O'Grady & Metz, 1987)といった深刻なストレス状況におかれている子どもを対象とした研究が多い。これらの研究より明らかになった点は、乳幼児期において過大なストレスから立ち直る力に貢献する個人特性と環境特性が存在する点である。Grotberg (1995)の研究に照らし合わせると、子どもの個人内要因と子どもにより獲得される要因が個人特性であり、子どもの周囲から

提供される要因が環境特性であると考えられる。

ところで先行研究において、個々のレジリエンスが測定される場合、研究者が定義した“レジリエンス”に対応する既存の尺度を複数組み合わせることが試みられていた。Murphy, et al. (1976)は、Cattel Infant Intelligence ScaleとComprehensive Coping Inventoryを使用し、Bradley, et al. (1994)は、レジリエンスを、認知的コンピテンス、行動コンピテンス、健康状態、成長状態という4領域からなるものとみなし、認知的コンピテンスの測定にはスタンフォードビネー知能検査を用い、行動コンピテンスの測定にはAchenbach Child Behavior Checklistを用い、さらに健康状態と成長状態に関しては医療機関における検査を行ったのである。すなわち初期のレジリエンス研究においては、まず研究者によりレジリエンスの定義がなされた後に、そのレジリエンスの概念に含まれるとする領域が構想され、それに見合った尺度を用い、それら複数の尺度からレジリエンスを測定したのである(Black, 1996)。このことは本来レジリエンスの概念に種々の特性や要因が数多く含まれ、それを基に提案されているために、レジリエンスの捉える範囲が漠然とし、曖昧になる(無藤, 1999)という指摘につながるようになる。

近年ではレジリエンス尺度もいくつか作成されてきた。古賀(1999)は、Hiewによって大学生用に作成された、状態レジリエンス尺度(促進的環境・内的・個人的強さ・スキルやコンピテンス各5項目からなる15項目)を参考に、幼児と児童を対象としたレジリエンス尺度を作成した。小花和(1999)は大学生用SRC(State-Resilience Scale)(Hiew & Grotberg, 1998 [古賀, 1999])を基にレジリエンス尺度15項目を構成し、さらにレジリエンスの特性に含まれると考えられる「愛想のよさ」、「素直さ」、「我慢強さ」、「問題解決指向」に関する8項目を新たに加え構成した後、因子分析によって項目を精選し、20項目からなる幼児用レジリエンス尺度を作成した。また、高辻(2002)はレジリエンスを、「幼児にとってストレスフルと思われる対人場面での内面や行動の柔軟さ」と捉え、信頼性と妥当性を兼ね揃えた尺度を作成している。

これら従来の尺度は、幼児のレジリエンスを測定する場合においてはいくつか検討すべき点

がある。例えばHiewの尺度を基に作成された古賀（1999）や小花和（1999）の尺度は、「自分のことが好きである」といった一般的な性格特性の特徴について記述した項目内容がある。これらの項目は現場の保育実践者が評定者となる場合、実際の場面に適用しにくく、安定した評価が得にくい点がある。一方高辻（2002）の尺度は、「社会的スキルの柔軟な利用」因子といったある側面に偏って構成されている。本研究では幼児のレジリエンスを、個人のほぼ一貫した内的な特性、すなわち個人内要因と定義とするため、新たに幼児の保育者評定用レジリエンス尺度を構成する。また、本研究においては石毛・無藤（2005）にならい、レジリエンスを「困難な出来事を経験しても個人を精神的健康へと導く心理的特性」とする。

予備調査

本研究ではレジリエンスを生涯にわたり一貫した個人内要因として狭義に定義し、大学生を対象としてレジリエンスを測定し、それを幼児を対象とした尺度を作成するための基礎とすることができると想定し調査を行った。

方法

調査対象者 大学生305名（男子141名，女子164名，平均年齢20.38歳，SD=0.79）。

調査期間 調査は2004年4月～5月に、講義時間及び講義時間終了後に一斉に実施した。

測定尺度 尺度を構成するにあたって、まず、幼児用レジリエンス尺度項目の選定のために小花和（1999）と高辻（2002）の尺度をKJ法的手法にて分類した。その結果、6つの下位概念〔「立ち直る力8項目」、「耐性11項目（ストレス耐性5項目・粘り強さ6項目）」、「新奇状況への適応8項目」、「気質7項目」、「向社会的行動4項目」、「援助者の存在5項目」〕が得られた。構成するレジリエンス尺度は個人内要因として捉えるため、以上の下位概念から立ち直る力、耐性（ストレス耐性・粘り強さ）、新奇状況への適応、気質の4概念を本研究のレジリエンスの構成概念とし、「援助者の存在」や「向社会的行動」は除いた。次に、この4つの構成概念に関連し、構成概念の項目として不適切だと判断した項目を削除した。さらに、下位尺度ごとの項目数をほぼ同じにするために、菅原・島・戸田・佐藤・北村（1994）の日本語版TTS（Toddler Temperament Scale）より、耐性概念（ストレス耐性）に「欲しいものが手に入らな

かったり、やりたいことができなくても、がまんできる」、気質概念に「慣れない場所に初めて行った時、不安を感じる」を加えた。また、柏木（1988）の、子どもが適応的であるために要求される行動制御を観察評定したデータを因子分析した項目群（自己抑制、自己主張・実現）より、耐性概念（粘り強さ）の項目に、「ちょっと失敗したりうまくいかないことがあると、あきらめてしまう傾向がある」、耐性概念（ストレス耐性）の項目に「自分のしたことを人にけなされるとしょげてしまう」、気質概念の項目に「友達同士が何かしていても、自分からあまり仲間にはいっていけない」を加え、合計25項目の質問紙とした。回答は「全くそう思う（5点）」、「ややそう思う（4点）」、「どちらともいえない（3点）」、「あまりそう思わない（2点）」、「全くそう思わない（1点）」の5段階評定により求めた。また調査対象者が回答する際、回答傾向の常同化および惰性を防ぐために、下位概念ごとにおよそ3分の1の項目を逆転項目とした。最終的に全25項目のうち逆転項目を8項目設けた。

ところで、本研究は保育者（教師）評定による幼児のレジリエンスを測定する尺度構成が目的である。参考にしている尺度においても幼児用のレジリエンス尺度から引用しているため、項目内容をそのまま大学生に用いるには不自然な箇所があった。例えば、「友達におもちゃをとられた時～」や「保育者に～」などといった語句である。そこで予備調査では大学生の生活に沿った内容に項目を修正し、大学生の自身に関する評価（自己評価）による質問紙を作成した。

結果と考察

まず、各項目の平均値と標準偏差を求めた。欠損値があるサンプルに関しては、システム欠損値（SPSSによるデフォルト処理）とした。全25項目のうち得点分布が大きく偏っている識別力の弱い項目を除くため、平均値±標準偏差値より外れている項目の有無を検討した結果、該当する項目はなかった。次に各項目と尺度全体の得点との関連性を吟味するため、項目一全体相関を求めたところ、各項目と全体の相関が極端に低い値を示す項目はなく、全ての項目について削除に該当する項目はなかった。さらに、因子構造を確認するために、全25項目に関してSPSSの斜交回転による確認的因子分析を実施した*。その結果、事前に仮定した4因子構造

Table 1 予備調査レジリエンス尺度の因子分析結果 主因子法バリマックス回転 (N = 305)

項目内容	I	II	III	共通性
1. 気質 ($\alpha = .80$)				
初めて会った人に対して、自分から積極的に近づき親しくなろうとする。	.724	-.092	.048	.536
愛想がよく人なつこい方である。	.666	-.083	.122	.466
何かをするとき、活発に動く方ではない ^{a)}	-.653	-.049	-.111	.441
友達同士が何かしていても、自分からあまり仲間に入っていけない ^{a)}	-.544	-.098	-.120	.320
今まで経験したことのないことでもためらわず、すぐに入り込める。	.526	.215	.226	.374
新しい活動や状況に慣れるのに時間がかかる方である。 ^{a)}	-.524	-.278	-.045	.354
何ごとにも好奇心が旺盛である。	.495	.114	.076	.264
2. 傷つきにくさ ($\alpha = .67$)				
友達とトラブルがあったとき、すぐに次の行動を始められない ^{a)}	-.137	-.611	-.107	.404
友達にいやなことを言われても、それほど気にしない。	-.019	.590	.050	.351
楽観的でそんなに失敗を心配することがない。	.123	.556	.006	.324
叱られて落ち込んでもしばらくすると回復する。	.135	.490	.216	.305
慣れない場所に初めて行った時、不安を感じる。 ^{a)}	-.223	-.403	.031	.213
3. 自己調整 ($\alpha = .62$)				
友達とトラブルがあったとき、自分自身でなんらかの解決方法を考える。	.219	-.013	.617	.429
ひとつの活動や遊びに集中して取り組み最後までやりとげる。	.169	-.061	.543	.327
欲しいものが手に入らなかつたり、やりたいことができなくても、がまんできる。	-.059	.046	.525	.281
大事にしているものを友達にこわされたとき、一時的に怒ることがあってもすぐに落ち着いて次に何ができるか考える。	.096	.251	.446	.271
友達から間違いや、してはいけないことを指摘された時に、状況に応じて自分の行動を変えることができる。	.138	-.053	.434	.210
因子寄与	3.25	1.86	1.65	
累積寄与率 (%)	13.01	20.47	27.07	

注) ^{a)} 逆転項目

は確認されなかった。そこで探索的因子分析のために主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子の解釈可能性および妥当性を考慮し、3因子にすることとした。また、分析の際、負荷量が.40に満たなかった8項目を除外した。各因子に含まれる項目の特徴から、第1因子(7項目)を、初めての活動や初めて会う人に対して肯定的な態度を示す「気質」、第2因子(5項目)を、ストレスフルな出来事に遭遇した時にネガティブな態度にならない「傷つきにくさ」、第3因子(5項目)を、適応的であるために要求される「自己調整」とし、レジリエンス尺度とした(Table 1)。下位尺度得点の平均及び標準偏差をTable 2に、下位尺度間相関をTable 3に示す。下位尺度間相関においては有意な正の相関を示したが、い

Table 2 大学生による下位尺度平均得点(M)と標準偏差(SD)

	M	SD
1. 気質 (7項目)	21.5	5.2
2. 傷つきにくさ (5項目)	13.4	3.5
3. 自己調整 (5項目)	18.6	2.8

ずれも弱い相関であり、因子間に強い関係があるとはいえないものであった。したがって、本研究で作成したレジリエンス尺度の「気質」、「傷つきにくさ」、「自己調整」の因子は比較的独立した要因であることがいえる。

予備調査におけるレジリエンス尺度の信頼性の検討

尺度の信頼性を検討するために、尺度全体及び下位尺度(気質・傷つきにくさ・自己調整)ごとにCronbachの α 係数を算出したところ、レジリエンス尺度全体で $r = .79$ という値を示し充分な一貫性が確かめられた。各因子では「気質」において $r = .80$ 、「傷つきにくさ」で $r = .67$ 、「自己調整」で $r = .62$ であり、一定程度の内的整合性が認められた。傷つきにくさと自己調整が若干低い数値を示しているが、気質因子と尺度全

Table 3 下位尺度間相関係数

	気質	傷つきにくさ	自己調整
気質	—		
傷つきにくさ	0.27**	—	
自己調整	0.28**	0.18**	—

** : $p < .01$ (両側)

体では高い数値が得られたこともあり、ある程度まとまりのある指標であるといえる。

本調査

レジリエンス尺度の信頼性の検討

本調査では保育者評定に戻した後のレジリエンス尺度の信頼性を検討する。尺度の内的整合性の検討をするともに、再テスト信頼性をみるため一ヶ月後に再び評定者に質問紙調査を依頼した。

方法

評定者 H市公立幼稚園年長児クラスの教諭1名。

対象児 H市公立幼稚園の年長児32名（男児16名，女児16名：平均年齢6歳，年齢範囲5歳8ヶ月から6歳6ヶ月，SD=3.6）。

調査期間 2004年10月。

測定尺度 予備調査にて尺度構成を行ったレジリエンス項目は大学生に適用できるように一部を改変したため、これらの項目を再びもとの保育者評定による幼児の評価ができる文体に戻した。さらに、下位尺度（気質7項目・傷つきにくさ5項目・自己調整5項目）ごとに、項目のおよそ3分の1を逆転項目とし、ランダムに並び替えた。

結果

各下位尺度（気質，傷つきにくさ，自己調整）得点の平均値と標準偏差を求めた（Table 4）。次に尺度全体及び下位尺度（気質・傷つきにくさ・自己調整）ごとにCronbachの α 係数を算出したところ，レジリエンス尺度全体で $r = .85$ という値を示し，各因子では「気質」において $r = .89$ ，「傷つきにくさ」で $r = .65$ ，「自己調整」で $r = .60$ であり，一定程度の内的整合性が認められた。「傷つきにくさ」と「自己調整」においてやや低い数値を示したのは予備調査と同じ結果となった。また，初回調査及び一ヶ月後の調査における2回分の得点より，再テスト信頼性係数（Pearsonの相関係数）を求めたところ， $r = .719$ （ $p < .01$ ）であり，比較的高い相関が得られた。

Table 4 保育者による下位尺度平均点(M)と標準偏差(SD)

	M	SD
1. 気質（7項目）	19.4	6.6
2. 傷つきにくさ（5項目）	15.5	3.7
3. 自己調整（5項目）	18.7	3.2

総合考察

本研究の目的は，幼児の個人内要因を反映するレジリエンス尺度の検討をすることであった。大学生305名に対して予備調査を行った結果，初めての活動や初めて会う人に対して肯定的な態度を示す「気質」，ストレスフルな出来事に遭遇した時にネガティブにならない「傷つきにくさ」，適応的であるために要求される「自己調整」という3つの因子を見出した。また，Cronbachの α 係数の分析結果は，レジリエンス尺度が下位尺度および全体としてある程度の内的整合性を持つことを示した。

次に，本調査において保育者評定によるレジリエンス尺度の信頼性を検討した。内的整合性および再テスト信頼性を検討した結果より，尺度が一定程度の信頼性をもつことが確認された。今後はレジリエンス尺度の妥当性についての検討が必要である。また，今回は年長児のみを対象としているが，今後は年中児など他の年齢にも広げて尺度の信頼性及び妥当性の検討をしていくことが望まれる。また，本研究で構成したレジリエンス尺度は3つの下位尺度からなり，個人の得点はこれら3つの下位尺度の合計点からなるものである。しかし各得点の割合には個人差が生じる。例えば尺度得点と同じであっても，「気質」，「傷つきにくさ」，「自己調整」の3つの得点が平均してほぼ同じ個人もいれば，ある下位尺度の得点が高い個人もいることが考えられる。個人がどの資源を持ちあわせるかでレジリエンスにタイプがあることも考えられる。今後下位尺度ごとに個人のレジリエンス資源を検討していくことも，個人に対してアプローチをする際，有効なヒントとなると考えられる。

ところで，最近ではレジリエンス教育といった予防的な観点からレジリエンスを捉える動きがみられる（Gurian, Kamboukos, Levine, Pearlman, & Wasser, 2006；Mandel, Mullett, Brown, & Cloitre, 2006）。レジリエンス教育とは，保護者や教諭，そして子どもに関わる援助者が子どものレジリエンスを促進するためにどのような関わりが必要か，また心理的危機に陥った際にどのようなフォローをすべきかを示唆するものであり，学校現場において子どもたちにも直接“レジリエンス”の概念についてアプローチをする。今後こうしたレジリエンス教育が普及していく可能性があるなかで，レジリエンス

教育を最も効果的なものとするためには、まずその時点で個人が持つレジリエンスの資源を教師等の子どもに関わる周囲が把握することが望ましいと考えられる。さらに個人内要因としてのレジリエンスを把握することは、個人が危機に直面した際のサポートにおいてある程度の予測が可能となり、また予防的な支援においても有効となる。レジリエンスには個人差があるため、レジリエンス教育の方法や手段においてもある程度の柔軟さが求められる。個々の持つレジリエンスを把握しつつ、レジリエンス教育を通してレジリエンスの素地を養うのである。それは実際に危機に陥った際、どの側面からのアプローチが効果的なのか、支援方法は何か有効であるのかといったその個人に沿った対応を検討できることにつながる。個人のレジリエンスを把握することはすなわち、レジリエンス教育といったすべての個人に共通する支援をさらに有効なものとし、また個々に沿った支援を可能なものにすると考えられる。

ところで、レジリエンスは生涯にわたり個人内要因が作用するが (Grotberg, 1995), その一方で環境的な要因も無視することはできない (Cohen, Moffitt, Caspi, & Taylor, 2004)。Grotberg (1995) によれば、8歳未満の子どもに関しては、子どもの周囲から提供される要因も重要であるとしている。乳幼児期においては主に親や保育者といった養育者が、周囲から得られる主なサポート要因となる。個人は発達に伴い行動範囲が広がることにより、自ずと取り巻く環境も広がりを見せ、様々な人間関係を構築し、サポート資源を得ていく。個人を取り巻くサポート資源が多様化していくことは、環境特性としての広義のレジリエンスが育てられることにつながる。それぞれの発達段階における環境特性として重要なレジリエンス要因は徐々に明らかになってきているが (石毛・無藤, 2005), 幼児期において重要な存在である養育者の如何なる働きかけやサポートが有効なのかを検討することが今後の課題となる。さらに、個人内要因としてのレジリエンスと、周囲から得られるサポート要因としてのレジリエンスとの関係を見ていくことが望まれる。そのためにはまず個人内特性としてのレジリエンスを捉えることが必要となる。

*) これまでの研究結果などから、尺度を構成する因子が独立なものとして想定されないことか

ら、斜交回転を行った。

引用文献

- Black, M. 1996 Resilience among 4-year-old children of adolescent parents. *Journal of Adolescent Health*, 18, 2, 129.
- Bradley, R. H., Whiteside, L., Mundfrom, D. J., Casey, P. H., Kelleher, K. J., & Pope, S. K. 1994 Early indications of resilience and their relation to experiences in the home environments of low birth weight, premature children living in poverty. *Child Development*, 65, 346-360.
- Cohen, J., Moffitt, T. E., Caspi, A., Taylor, A. 2004 Genetic and Environmental Processes In Young Children's Resilience and it, Vulnerability to Socioeconomic Deprivation. *Child Development*, 75, 3, 651-668.
- Grotberg, E. 1995 Promoting resilience in children : Strengthening the human spiritlands ; The Bernerd Van Leer Foundation
- Hiew, C. & Grotberg, E. 1998 Invited Presentation at Mukogawa Women's University Presentation Paper.
- Gurian, A., Kamboukos, D., Levine, E., Pearlman, M., Wasser., R. 2006 Caring for Kids After Trauma, Disaster and Death : A GUIDE FOR PARENTS AND PROFESSIONALS 29-31.
[http:// www.hrs.org.nz / fostercare / Files / Crisis_Guide02.pdf](http://www.hrs.org.nz/fostercare/Files/Crisis_Guide02.pdf) 2008, 1/16.
- 石毛みどり・無藤隆 2005 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャルサポートとの関連 —受験期の学業場面に着目して— 教育心理学研究, 53, 356-367.
- 柏木恵子 1988 幼児期における自己の発達 東京大学出版会.
- 古賀美幸 1999 幼児及び児童のレジリエンスに関する研究—不安との関連から—平成11年度広島大学教育学研究科修士論文.
- Luthar, S. S. & Cicchetti, D. 2000 The construct of resilience: Implications for interventions and social policies. *Development and Psychopathology*, 12, 857-885.
- Mandel, J., Mullett, E., Brown, J. & Cloitre, M. 2006 School-Based Intervention Program : Institute of Trauma and Stress, New York University Child Study Center Cultivating

- Resiliency : A Guide for Parents and School Personnel [http:// www.scholastic.com / discussionguides](http://www.scholastic.com/discussionguides) 2008, 1/16.
- Masten, A. S., & Coatsworth, J. D. 1995 Competence, resilience, and psychopathology. In Cicchetti, D., & Cohen, D. J. (Eds), *Developmental psychopathology, 2; Risk, disorder, and adoption*. 715-752. Oxford, England.
- Murphy, L., & Moriarty, A. 1976 Vulnerability, coping, and growth from infancy to adolescence. New Haven, CT : Yale University Press.
- 無藤隆 弾力性（レジリエンス）の教育をめぐる 1999 日本発達心理学会第10回大会発表論文集, 113.
- 小花和W. 尚子 1999 幼児のストレス反応とレジリエンス 四條暁学園女子短期大学研究論文集, 33, 47-62.
- O'Grady, D & Metz, J. R. 1987 Resilience in children at high risk for psychological disorder. *Journal of Pediatric Psychology*, 12 (1), 3-23.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 菅原ますみ・島悟・戸田まり・佐藤達哉・北村俊則 1994 乳幼児期にみられる行動特徴—日本語版RITQおよびTTSの検討—教育心理学研究, 42, 315-323.
- 祐宗省三 2003 ウェルビーイングの発達学 pp.16-21. 北大路書房.
- 高橋恵子 1999 人はどのように“resilient”なのか 日本発達心理学会第10回大会発表論文集, 112.
- 高辻千恵 2002 幼児の園生活におけるレジリエンス—尺度の作成と対人場面への反応による妥当性の検討—教育心理学研究, 50, 427-435.
- Werner, E. E., & Smith, S. S. 2002 *Journeys from Childhood to Midlife Risk, Resilience, and Recovery* Cornell University Press.

補助資料 [幼児用レジリエンス尺度]

1. 愛想がよく人になつきやすい
2. 行事（及びその練習）や当番など、新しい活動や状況に慣れるのに時間がかかる
3. 楽観的でそんなに失敗を心配することがない
4. 今まで経験したことの無い行事や遊びでもためらわずにすぐに入り込める
5. 友達から間違いやルール違反を指摘されたときに、状況に応じて自分の行動を変えられない
6. 叱られて泣いてもけろりとしている
7. つくったものを友達にこわされたとき、すぐに新しく作り直し始めることができる
8. 新しい友達や保育者（教師）に対して、自分から積極的に近づき親しくなろうとする
9. 欲しいものが手に入らなかったり、やりたいことができないとがまんできない
10. 友達に嫌なことを言われてもそれほど気にしない
11. 友達とトラブルがあったとき、自分自身で何らかの解決方法を考える
12. 活発なほうである
13. 慣れない場所に初めて行った時、不安な態度を示す
14. ひとつの活動や遊びに集中して取り組み、最後までやり遂げる
15. 友達におもちゃをとられたとき、すぐに別の遊びを始められない
16. 何事にも好奇心が旺盛である
17. 友達同士が何かしていても、自分からあまり仲間に入っていけない

付記

本論文は、広島大学大学院教育学研究科の修士論文の一部をまとめ直したものです。ご助言を頂きました広島大学大学院教育学研究科修士生古賀美幸さんありがとうございます。データ収集にご協力頂きました保育園、幼稚園の皆様、保護者の皆様、園児の皆様に厚くお礼申し上げます。